戦国期における諏訪家の興亡

高野賢彦

日本の歴史にかつて諏訪国という国があった。奈良時代の元正天皇の養老五年（七二一）に信濃国を割いて設置されたが、足掛け十一年後の天平三年（七三一）に廃されて信濃国に組戻された。これは聖武天皇のとき国分寺造営に要する経費節減の一環であったようだ。

大国主命の子の建御名方命が兄の事代主命に追われて逃げてきた先が諏訪の地であり、諏訪から外へ出ることを禁じられた。『古事記』では諏訪大社の起源について「建御名方命が科野国州羽に至って霊場を示し、瑞籬を押し開き給う」とあり、造営は寅申の干支であるというが、諏訪大明神は土着の神ではなく、出雲から移り住んだ外来の神であるという。

しかし、これに対して地方土着の諏訪大明神が用明天皇時代に社壇を持ったとする異説がある。すなわち諏訪伊那地方の荒ぶる守矢神が守屋山麓に社壇を構えたが、やがて諏訪へ侵入してきた建御名方命に敗れ、建御名方命を諏訪大祝と称する現人神（生き神）が成立し、祭祀の交替、国譲りが行われたという。

諏訪大社には上社と下社があり、上社に前宮と本宮が、下社に春宮と秋宮がある。上社本宮の例でみれば、現人神の大祝は建御名方命の後裔であり、「我において体はなく祝をもって体となす」という未犯の童男である。大和国の三輪神社には三輪山があり、諏訪本宮には拝殿の後ろに守屋山、すなわち神体山である。

諏訪神家一族は室町時代の中期に大祝の神家と行政を司る惣領家に分かれ、両家の間に激しい争が巻き起こった。なお現人神の大祝

の下には神長官（守矢氏）、禰宜、権祝、擬祝、副祝と言われる五官が置かれている。

一．上社の内紛と下社の没落

諏訪上社の大祝と下社の竹居祝の金刺氏はしばしば争った。諏訪の大祝職と行政権はもともと惣領家が取り仕切っていた。しかし南北朝の動乱以後、惣領家とは別家の庶流から大祝に就く例がしばしば見られるようになり、文明十五年（一四七九）正月八日に惣領家と庶流の内紛が頂点に達した。

庶流の大祝継満は大祝職を二十年も占有した。そのうえ郡外出兵の禁を破るなど惣領政満の指揮に従わず、政満から行政権を奪い取ろうと画策しさえした。その挙句に正月八日に惣領家一族十余人を神殿に招き、酒食をもてなして騙し討ちにした。諏訪郡内は騒然となり、大祝継満は一族を引き連れて近くの干沢城へ立て籠った。しかし惣領家一統に敗れて高遠へ逃亡した。この乱に便乗して下社の金刺興春が長年の仇敵である上社惣領家を滅ぼそうと挙兵し、また府中（松本）の小笠原朝長が惣領家に加担して参入するなど、諏訪郡内は大混乱に陥った。

この文明十五年の騒乱後、諏訪大社の大祝の地位と行政権は惣領家の手に帰した。『信濃史料』によれば、文明十六年（一四八四）十二月には故政満の第二子宮法師丸が五歳にして大祝に立ち、神長官守矢満実が宮法師丸に烏帽子や狩衣などを着せた。宮法師丸は大祝を退任すると刑部大輔頼満と号し、その権力はますます強大化して最後には入道して碧雲斎を名乗った。

頼満は下社の金刺興春が文明の騒乱のとき庶流の大祝継満に加担したので興春を攻めて社殿を焼き払い、討ち取った興春の首を二昼夜にわたって大熊城にさらした。また府中の小笠原朝長が下社領の小野・塩尻郷を奪い取ったので下社は大きな打撃を受けた。

さらに頼満は時代が下って永正十五年（一五一八）十二月に興春の孫昌春が籠っていた萩倉の要害を攻め落とした。そのため金刺一族は離散し、昌春はやがて甲斐の武田信虎のもとへ亡命した。それでも下社はなお命脈だけは保っていた。

権力者頼満は大社の大祝を次々に任命した。まず永正二年（一五

〇五）九月に七歳の子を大祝の地位に就け、その子は退位して頼隆と号した。また永正十一年（一五一四）八月には頼満の次子で九歳の子を大祝とし、さらに永正十七年（一五二〇）十二月には頼満の孫宮増丸（のちの頼重＝頼隆の嫡子）が五歳になると、その子を大祝とした。

神長官守矢頼実は先例のごとく宮増丸に装束を着せて袴腰を結ぼうとした。すると禰宜矢嶋満清が「われが結ばん」と言い出した。満清は前々から神長官の地位を奪い取ろうと意欲を燃やしていた。この言い争いを耳にした頼満は二人の間に分け入って「互いの問答は無益だ」と言って自ら袴腰を結んだ。

宮増丸は翌大永元年十一月晦日に母親が頓死したので大祝を退いた。しかし大祝に就くべき適当な人が見当たらなかったので間もなく復位した。宮増丸が退位して頼重を名乗ると、その跡は祖父頼満の六男宮若丸が享禄二年（一五二九）十二月に七歳で大祝に就き、さらにその跡は天文七年（一五三八）二月に頼重の弟頼高が大祝を継いだ。

頼満の嫡子頼隆は享禄三年四月三日より歓楽（病気）になり、一八日の牛の刻、折しも諏訪上社の一の御柱引きの日であったが、御罰が当たって頓死した。法名は一鶚（いちがく）、御年三十二であった。死因は前年十二月に宮若丸が大祝に立つとき、神長官が装束を着せるにあたって先年の会稽（かいけい）の恥をすすがんと思い、頼隆に神代よりの引き付けをお目に掛けようとした。しかし頼隆が神長官の招きに応じなかった。

頼隆はもともと禰宜満清の思惑、すなわち神長官の地位を奪い取ろうという意気込みを受け容れようと画策していたので諏訪では神罰が当たって頓死したのだという噂が立った。それゆえこの年、神家一族は一人の例外を除いて御柱の祭礼に出仕しなかった。

二．碧雲斎頼満の孫頼重の滅亡

頼満は大祝に就いてから五十六年の長きにわたって諏訪一円を支配した。そして碧雲斎と号して絶大な権力を振るい、甲斐の武田信虎や府中の小笠原朝長にも一目置かれる存在であった。

上洛意欲を有する信虎は遠く善

光寺まで偵察したが、現実には碧雲斎の諏訪を避けて佐久郡を攻めた。また小田原の北条氏綱や駿河の今川勢と戦うときには常に背後の碧雲斎の存在が気になった。しかし下社の金刺昌春が助けを求めてくると、信虎の目はおのずから諏訪へ向くようになった。

　信虎は享禄元年（一五二八）八月に諏訪との国境へ兵馬を進め、晦日に神戸・堺川で一日に二度も合戦をした。昼の合戦では信虎が勝ち、夜戦では碧雲斎が勝った。また碧雲斎は享禄四年に甲斐の逸見信元から救援要請を受けると、甲斐の韮崎まで侵入し、さらに翌天文元年（一五三二）にも再び侵入してきた。

　信虎は天文四年に今川義元・北条氏綱の連合軍に攻められると、碧雲斎に和睦を申し入れ、九月に甲信国境の堺川のほとりで会談した。信虎が碧雲斎と和談を進めていると、そこへ山鳩色の装束を着ていた頼重が挨拶に来た。それから四年後の十二月のこと、強権を誇っていた碧雲斎は背中の腫物が悪化して死去した。

　その死によって甲斐と諏訪の力関係が逆転し、信虎は天文九年十一月に自分の娘禰々(信玄の妹)を頼重に押しつけた。頼重はすでに府中の小笠原長時の家老下枝氏（麻績氏）の娘を娶って一女をもうけていたが、その妻と御寮人を離別して禰々を迎え入れた。

　信虎はさらに天文十年（一五四一）五月に頼重と坂城の村上義清に声をかけ、海野平の名族滋野一族を攻めて意気揚々と凱旋してきた。しかし、その直後に信虎はかねてから今川義元に招かれていたので隠密裏に駿河へ向かった。ところが六月十四日に甲駿国境を越えると、うしろをつけてきた信玄に国境を閉鎖されてしまった。この追放劇には義元も一枚噛んでおり、義弟信玄と結託していたのである。

　信玄は翌天文十一年六月末に義弟頼重の意表をついて諏訪へ侵入した。頼重はまさか信玄が襲ってくるとは夢にも思わず必死に防戦しながら上原城から桑原城へ落ち延びた。そこへ信玄が「両家とも世代替わりしたので甲府で新たに和議を結び直したい」と使者を寄越すと、頼重は何も疑うことなく七月五日に甲府へ赴いた。

　頼重は体よく接待を受けて猿楽

など見物していたが、七月二十一日に東光寺学寮で自害へ追い込まれた。禰宜満清にたぶらかされて甲府へ出てきた大祝頼高も自害させられ、頼重夫人禰々も過労で死去した。頼重嫡子の乳呑児寅王はなお十年ほど生かされていた。

信玄は頼重が離別した御寮人が隠れなき美人であると聞くと、御寮人を側室にしようと思い、拉致して天文十一年十一月に甲府で結婚式を挙げた。そして諏訪御寮人との間に四郎勝頼（頼重の孫）が生まれると、寅王は頼重の子である自分の方が諏訪家を再興するには相応しいと思ったものの望みを失い、昼寝中の信玄を刺し殺そうとした。そして今川義元のもとへ逃亡する途次、富士川の川端で殺されたという。

信玄の侍大将らは口々に「謀殺した敵将の娘を側室にするとは驚きだ。万が一寝首を掻かれたらどうするのか。美女なら国内にいくらでもいるわ…」と言って猛反対した。しかし信玄は頑として聞き入れず、挙式までしたのだから、よほど惚れていたのである。

諏訪御寮人は信玄最愛の女性であったが、四郎勝頼が十歳のとき死去した。御寮人は日ごろ信玄に「四郎をして諏訪家を再興してほしい。そして四郎を晴信（信玄）さまの御跡目にしてほしい」とお願いしていた。

勝頼は一般に武田勝頼と言われている。しかし元服して諏訪勝頼となり名前に武田の通字の「信」という字がなく、諏訪家の「頼」の字がつけられている。そして諏訪頼重の孫として諏訪家を再興したが、その後武田姓に改姓した事実がない。信玄が死に際して遺言したときも、あくまでも諏訪勝頼のままであった

勝頼は信玄が死ぬ二年前に高遠から甲府へ移り住んだ。高遠城主時代に信濃国一の宮の小野神社（塩尻市）へ梵鐘を寄進したが、梵鐘に「諏訪四郎神勝頼」と刻むほど諏訪姓に対する愛着と大いなる誇りをもっていた。

信玄の嫡子義信の妻は今川義元の娘であった。それゆえ義信は義元の死後に信玄が駿河を攻め取ろうとすると強く反発し、また川中島合戦の最中にも戦術面で信玄と意見が合わず、さらに信玄がつよく愛していた諏訪御寮人の子勝頼とも不仲であった。

信玄は義信と七年越しの抗争を続けていたので隠密を放って義信の周辺を探ると、指南役の飫富兵部（信虎・信玄の最強の侍大将）とともに戦陣で信玄を殺害しようとしていることが分かった。信玄は飫富兵部を直ちに成敗し、義信も永禄八年(一五六五)八月に捕らえて東光寺へ押し込めた。

跡目義信の扱いに悩んでいた信玄は苦心の末に甲斐・信濃・西上野の有力家臣数百人から熊野牛王法印の裏に「いかなることがあっても信玄様に叛逆いたしません」という血判誓書を取り立てた。そしてそれを信州上田原の大八州の霊神・下之郷大明神(生島足島神社)へ納め、泣く泣く義信を成敗した。永禄十年十月十九日のことである。

義信夫人は兄の今川氏真が差し向けてきた輿に乗り、女児を連れて十一月初めに駿府へ帰った。信玄は義信との長年の抗争と跡目問題に苦悩するあまり、ついにストレス性の胃病にかかった。駿河出兵の直前のことであったが吐血したのであろうか、侍医の板坂法印は養生専一にするように、と諭した。勝頼は義信が成敗された翌月、妻（織田信長の姪）との間に男子をもうけた。すると信玄は諏訪家の子に信勝と命名して自分の養子にした。

信玄は胃病を押して出陣し、『甲陽軍鑑』によれば二俣城(浜松市)攻撃中にも吐血したか下血したようである。そして三方原戦で徳川家康と信長の援兵、都合一万二千を打ち破ったものの病状はさらに悪化し、将軍足利義昭が首を長くしていたにもかかわらず動けなかった。

信玄は浜名湖の引佐細江の寒村刑部で年末年始の二週間を休養していたが、敵地から抜け出して甲府へ帰ることにした。途中で東三河新城城を攻め落としたが、鳳來寺や福田寺などで休憩しながら輿を急がせた。しかし信濃南端の根羽村の上で動けなくなり、五十三を一期として世を去った。

三・頼重の孫勝頼の滅亡原因

諏訪勝頼は父信玄の遺言で跡目になれなかった。一方信勝は十年後の十六歳のとき信玄の家督を継ぎ、勝頼はそれまで信勝の陣代を務めることになった。この陣代ゆえに勝頼は諏訪姓にもかかわらず武田勝頼と言われるようになった

のだ。

　若い諏訪勝頼は威勢がよく、信長の東美濃などで明智城のほか数十の城を陥れ、信玄が落とせなかった難攻の遠州高天神城をも陥れた。そして上杉景勝から東上野（利根川以東）を譲り受けたので信玄のときより遥かに版図を拡大した。勝頼は信勝の生母を難産で失って以来、ながらく空閨を保っていたが長篠敗退後の天正五年（一五七七）一月に守備を固めるために北条氏政の妹を夫人に迎え入れた。

　しかし勝頼は越後のお館の乱で義兄氏政と対立して不利な形勢にあった景勝に泣きつかれた。景勝が莫大な黄金と東上野の領地を提供し、さらに勝頼の妹を妻として迎え入れて旗下になると申し出ると、勝頼はこれを受け入れて景勝と同盟を結んだ。

　勝頼は新たに敵となった義兄氏政と家康に駿遠で振り回されて戦力を消耗し、天正九年（一五八一）二月に高天神城を失ってしまった。勝頼が天正十年一月から信長らの連合軍に攻め込まれるに至った原因、すなわち勝頼滅亡の原因は実に上杉景勝と同盟して義兄氏政を敵にまわした外交上の失敗にある。

　勝頼は信長連合の大軍勢に追いつめられて田野（甲府市大和）で信勝、夫人ともども自害したが、それは信玄死去からちょうど十年目にあたる天正十年（一五八二）三月である。勝頼は信玄の遺言に従って信勝元服の為に擐甲（鎧を身体に着けること）の礼を執り行った。信勝はここに信玄の家督を継いで甲斐武田二十一代目として自害したのである。

以上

参考文献

「信濃史料」長野県、信濃教育会 ほか
「諏訪史概説」山田茂保著 岡谷書店刊
「諏訪市史」諏訪市史編纂委員会
「甲陽軍艦」磯貝正義・服部治則 校注 新人物往来社刊